

心理学的英知研究の流れ

教育心理学コース 高山 緑

A Review of Psychological Studies on Wisdom

Midori TAKAYAMA

The concept of wisdom is viewed as one of the key concepts in the explaining unique and progressive aspects of performance in adulthood now. The primary purpose of this article is to review the psychological studies on wisdom. At first, people's implicit theories of wisdom and wise persons are discussed. It is evident that people have systematic implicit theories of wisdom and wise persons, and that wisdom is most distinguished from intelligence in the dimension of advice and judgment. Next, the studies are considered from both personal and cognitive points of view.

目 次

- I. はじめに
- II. 英知の暗黙的理論研究
- III. 英知の明示的英知研究
 - A. Eriksonian の人格研究
 - B. Piagetian の認知発達モデル
 - C. 問題解決行動としての英知研究
- IV. まとめ

I. はじめに

英知という概念は、哲学や宗教において、古くから最も頻繁に取り上げられてきたテーマの一つである。世界の各地の伝承文学の中に、聖書の中に、英知文学の中に、哲学書の中に、そしてさまざまな宗教書の中に、時には人間の最高の知識形態として、また時には優れた知性と人格を併せ持った人間の行動形態として表現されてきた。しかし、このように人間の知性、理性、人格、感情、動機などどれをとってもきわめて心理学的な題材であると思われる英知という概念が、心理学的研究の題材として注目されはじめたのは1980年代前後くらいからである。

英知という概念がごく最近まで研究の対象とはなっていない理由のひとつには、19世紀後半から20世紀にかけて、心理学が行動主義的傾向を強め、自然科学的な方法を応用し、実証的事実を集積することによって心理

学的知識を体系化しようとする動きが強まったことが挙げられる (Chandler & Holliday, 1990 ; Baltes, 1987 ; Baltes, Reese, & Lipsitt, 1980)。また、第2に20世紀の前半ころまでは発達心理学の関心は児童期、青年期に集中しており、成年期以降において、英知をはじめなんらかの特性が発達するという発想は無視される傾向があったからである (Clayton & Birren, 1980 ; Baltes, 1987)。そのため、S. Hall(1922), Erikson(1968, 1982), Jung (1933) などのごく一部の研究を除いては、英知のような多義的で実証研究では扱いにくい概念は心理学研究では扱われなくなってしまったのである。しかし、1960年代以降、老年心理学や生涯発達心理学の研究の蓄積が成されていく中で、成年期以降の人格や認知機能の発達に関心が高まり、英知という概念も注目されるようになってきた (Baltes & Smith, 1990 ; Chandler & Holliday, 1990)。

現在、心理学的英知研究は、英知という現象に気付き、いかに研究するかを考える時期から、理論化と研究法の確立がなされ、パラダイムがたてられる時期に移行している (Sternberg, 1990b)。本論文では、ここ20数年にわたる心理学的英知研究の中で、英知が認知、人格、生涯発達、老年心理学などさまざまな領域からどのように定義され、研究されてきているかを展望することを目的とする。

II. 英知の暗黙的理論研究

英知とは何か？ 英知を備えた人一賢人とはどのような人のことを言うのだろうか？ 英知とは果たして知能、創造性とどのような違いがあるものなのだろうか？ 心理学における英知研究はまず、英知に対するこれらの疑問に答えることから始まった。

英知を定義づけようという動きは1980年代前後からみられる。その流れの1つは、英知や賢人（英知が備わっている人）という概念が、日常の中で、人々にどのように理解され、日常語の中で使用されているか、ということ明らかにする中から英知を定義しようとするものである。これは英知の暗黙的理論(Sternberg, 1985a ; Sternberg, 1985b) と呼ばれるものである。

Clayton (1976) は哲学や宗教における英知の歴史的展望から、英知の多面性に注目し、多次元尺度法 (Multidimensional Scaling : MDS) を使用して、一般の人が考えている賢人 (wise person) の特性を明らかにしようと試みている。Clayton (1976) は賢人の特性として3つの側面を挙げている；(1)共感、同情などの感情的側面、(2)直観力豊かな、内省的な、など内省的過程、(3)経験、知性などの認知的能力、である (Clayton & Birren, 1980)。その後 Clayton & Birren (1980) は、被検者を青年から老年にまで拡大させて、更に同様の調査を行い、(1)感情的内容、(2)内省的な内容、(3)認知的内容の他に (4)「年齢を重ねた」、「経験豊かな」など発達の・加齢関連的内容という4つの側面があることを報告した。また、老年群では全ての刺激語が4つのどれかのクラスターに分類され (他の群では分類しきれない刺激語がいくつかあった)、賢人に対する比較的明確なイメージがあることが示唆された。更に、「英知のある」と他の刺激語との関係を見ると、青年群・中年群は「英知のある」と「年齢を重ねた」は比較的近い関係ととらえているのに対して、老年群は「英知のある」と「年齢を重ねた」の関係はあまり近くないと認識している。一方、老年群は他群よりも、「相手を理解する」、「同情する」という感情的な刺激語を「暦年齢」や「経験」という刺激語よりも「英知のある」と近い関係にあると認識しているという結果が報告された。

Holliday & Chandler (1986) も同様に、英知の暗黙的理論についての研究を行い、5つの因子が抽出されている；第1因子は経験にもとづいた格別な理解力 (経験から学ぶ、大きな文脈から物事を理解するなど)、第2因子は判断力およびコミュニケーション能力 (良いアドバイスをする、人生を理解するなど) で日常の問題につい

て理解し正しい判断をする能力である。第3因子は一般的コンピテンス (知的な、教育を受けたなど)、第4因子は対人スキル (感受性の強い、交際好きな、愛想がよいなど)、第5因子は社会的慎ましき (分離しているなど) である。

Chandler & Holliday (1990) はこのうち第1因子第2因子に挙げられている2つの能力は特に英知が他の概念と区別される最も本質的な部分であり、残りの第3、第4、第5にあげられた因子は人々が英知を備えた人にとって必要な要素 (あることが望まれている要素) ではあるが、それは特に英知そのものの本質的・原型的な部分ではないと考察している。

日本では中西 (1995) が大学生33名を対象に「英智 (wisdom) から連想されるものは何か」という質問をして整理している (ただし、これはMDSや因子分析法を用いたものではなく、中西により主観的に分類がなされている)。知性、知恵という知能に近い認知的な能力、知識的側面 (知識、常識、教養)、判断力 (判断力、分別など) などが挙げられた。一方、自己洞察、ユーモア感、徳、正義など人格的な反応も少数ではあるが挙げられていた。

また「賢人 (wise man) の特性」を列挙させた結果では、認知的内容と人格的内容がほぼ同じ程度に挙げられている。英知と同様に知能に近い認知的な能力、知識的側面、判断力、などのほかに、洞察力、人間理解、思慮の柔軟性などが挙げられた。また、人格的側面で指導力 (指導力、人望がある、カリスマ性)、やさしや、同情的、謙虚さなど「人間愛にみちた人物」 (中西, 1995)、冷静沈着、自己洞察力をもち、自己に厳しく「自分を客観視できる人柄」 (中西, 1995) が挙げられている。中西 (1995) は、この結果をもとに、日本人の英知や賢人に対する暗黙的理論の内容は、Sternberg (1985b) の研究結果と一致しており、日本語文化圏においても英語文化圏と同様の潜在的理論をもっていると指摘している。

日常生活の中で英知がどのように概念化されているか、という観点から英知の定義づけをしようとする研究の流れの中で、第2の重要な研究は、知能や創造性のよう英知と関連のある概念との比較を通じて、(日常語の中で) 英知がどのように意味づけられているかを説明しようとする研究である。

Sternberg (1985b) は、芸術、経営学、哲学、物理学の専門家および一般の成人を被験者とした複数の実験を通じて、創造性、知能という他の構成概念との関係の中で英知の位置づけを試みている。一連の実験を通じて、人々は知能、創造性、英知に対して体系的な暗黙的理論をそ

れぞれに自分の心の中にもっていること、自己評価する際も他者評価する際にも、その暗黙的理論を価値基準として使用していることなどが明らかになった。また英知の多面的な要素として以下の6つの要素が見出された；(1)論理的能力がある（問題や状況を把握し解決する、論理的思考ができる、正誤の区別ができる、特定の問題に知識を応用できるなど）、(2)賢明さが備わる（他者へ配慮する、アドバイスをする、多様な人と付き合える、公正で人の話をよく聞くなど）、(3)アイデア（知識、思考、概念、観念）や環境から学ぶ（他者の失敗から学ぶ、他者の経験から学ぶ）、(4)判断力がある（身体的・精神的に限界を知りその中で行動する、いつでも適切な判断ができる、目の前の結果だけを考えるのではなく長期展望ができるなど）、(5)情報を迅速に活用する（意志決定するために情報を詳細に集める、年を重ね、成熟し、経験がある、過去の成功や失敗を思いだし、そこから情報を得るなど）、(6)洞察力がある（事象の本質を見る、行間を読む、正しいまたは真実の立場から解決策を提案する、環境・状況を理解し解釈することができる）。この研究では、英知と知能の暗黙的理論において、論理的能力の点で重なるところがあるが、他者へ配慮する、アドバイスをするなどという賢明さの要素は知能や創造性にははままったく見られない、英知という概念の特有な要素である、という指摘がなされている。

その後の英知の定義に関する研究(Sternberg, 1990b)では、Sterberg (1985a；1985b；1988a；1988b)をもとに、6つの観点（知識、情報過程、知的スタイル、パーソナリティ、モチベーション、環境的文脈）から知能、創造性、英知の定義を整理し、3つの概念の違いを明確化している（表1）。

英知を日常語から定義しようという暗黙的理論研究の第3の流れは、英知を備えている人として他者から推薦された人の特性を研究するものである。英知を備えている人と他者を推薦するとき、人は自分がこころの中に描いている英知についての暗黙の（あるいは主観的な）理論に照らし合わせていると考えられる。そこで、英知を備えていると推薦された特性を調べることによって、逆にそこに反映されている英知の暗黙的理論を明らかにしようというのがこのような研究である。Perlmutter, Adams, Nyquist & Kaplan (1988) は20歳から90歳の被検者に、英知は年齢、性別、学歴とどれくらい関係があると考えているか聞いたところ、78%が年齢に、16%が性別に、68%が学歴に関係していると考えていた。また、被検者に被検者自身が賢人、つまり英知を備えている人と考えている人を3名推薦してもらい、その被推薦者の年齢、性別、学歴を特定してもらった。英知があると推薦された人の年齢は、20代の被検者では約50歳であった。被検者の年齢が上がるにつれて被推薦者の年齢も上が

表1 英知・知能・創造性の比較 (Sternberg 1990)

側面	英知	知能	創造性
(1) 知識	その限界と同様に前提や意味を知る	再生・分析・活用	知りうること以上のことを行く
(2) 知的過程	自動的なこととその理由を理解する	手続きの自動化	新しい課題への応用
(3) 知的スタイル	批判的判斷力	効率的実行力	立法的発想力
(4) 人格	あいまいさや障壁の理解	あいまいさを排除し普通の枠組みにおける障壁を乗り越える	あいまいさへの耐性と障壁の再定義
(5) 動機	知っていること、それが意味していることを理解する	知っていることと知られていることの活用	知られていることをこえて前進する
(6) 環境的布置状況	環境を深く理解するような評価	環境を幅広く理解するような評価	環境を現在知られているをこえて前進するような評価

り、60代以降の被検者は平均65歳の人を英知がある人として推薦していた。また被推薦者の性別では特に差はみられなかったが、男女とも同性の人を推薦する傾向が認められた。また被推薦者の学歴については相対的に高学歴であった。しかし数名、ほとんど教育を受けていない者も含まれていた。

Sowarka (1989) も被検者に賢人であると思う人を推薦させ、被推薦者の特徴を挙げさせている。その結果、英知と賢人の特性を指摘するという課題は、高齢の被検者の方がすぐにできたということ、また被検者は英知を備えた人として推薦した人は「すぐれた性格」の人であると指摘しているということが報告された (Staudinger & Baltes, 1994)。この他に英知が備わっていると推薦された人の特性から、英知と年齢の関係を検討したものに Heckhausen, Dixon, & Baltes (1989) がある。

まとめ

これらの暗黙的理論研究から英知、賢人についてどのような構造が浮かび上がってくるのだろうか。Clayton & Birren (1980), Holliday & Chandler (1986), および Sternberg (1985b) の結果を対応させてみたのが表 2 である。

まず, Holliday & Chandler (1986) の「判断力・コミュニケーション能力」は Sternberg (1985b) の「賢明さ」「判断力」「洞察力」と、また Clayton & Birren (1980) の「内省的内容」と「感情的内容」(共感, 相手を理解する) と共通性があると思われる。そこに共通してあるのは、「洞察力」「判断力」「アドバイス」する能力である。これらの要素は知能, 創造性とはオーバーラップをしない英知特有の要素でもある。特にアドバイスを与えるという点で、英知は極めて高度な対人的, 向社会的な能力があるということができよう。

また次に Holliday & Chandler (1986) の「経験にもとづいた理解力」は、Sternberg の「概念から学ぶ」「情報の活用」、また Clayton & Birren (1980) の「発達の・加齢的内容」とほぼ共通していると思われる。「年齢を重ね、経験が豊かで、人生の問題を大きな文脈の中で把握する力がある」という共通性があり、英知の第 2 の主要な要素である。しかし、その一方で、単に年齢をとれば英知は身につくのかということそうではないことも暗黙的理論研究の結果から示唆される。例えば Clayton & Birren (1980) の研究で、「英知のある」と「年齢を重ねた」が青年・中年群と比較して老年群においてあまり近い関係ではなかったのは、単に年齢を重ねただけでは英知は身につかないということをより感じ取っているからでは

表 2 暗黙的理論研究の比較

Holliday & Chandler (1986)	Sternberg (1985)	Clayton & Birren (1980)
判断力・コミュニケーション能力 (良いアドバイスをする) (人生を理解する)	賢明さ (他者への配慮, アドバイス) 判断力 (身体的, 精神的限界のみきわめ) 洞察力 (直感, 本質のみきわめる)	内省的 (思慮深い, 直感力豊かな) 感情的 (共感, 相手を理解する)
経験にもとづいた理解力 (経験から学ぶ) (大きな文脈から物事を理解する)	概念や環境から学ぶ 情報の活用 (年を重ね, 成熟し, 経験がある)	発達の・加齢的 (年齢を重ねた, 経験豊かな)
一般的コンピテンス (知的である, 教育を受けた)	論理的能力 (論理的思考)	認知的 (知性的, 実用的, 観察力の鋭い)
対人スキル (愛想がよい, 交際好きな)		(感情的) (平和的, やさしい)
社会的慎ましさ (社会から) 離れている)		

注) () 内は項目例

ないかと思われる。

3つの研究の共通性の第3は、Holliday & Chandler (1986)の「一般的コンピテンス」と、Sternberg (1985b)の「論理的能力」、Clayton & Birren (1980)の「認知的内容」との間にみられる。これは「知性があり、論理的な思考ができること」である。しかし、これは必ずしも英知に限定されるものではなく、特に知能とオーバーラップする要素である。英知が知能と異なるのは、知性があり論理的思考ができることにとどまらず、上述した洞察力、直観的判断をする能力があるところにあると考えられる。また、これは、高い教育を受けていることが、結果的にはそうであるにしても、必ずしも英知にとって必須のものではない(Perlmutter et al., 1988),ということにもつながるだろう。

以上の3点が3つの研究で共通している要素であると考えられる。その他にHolliday & Chandler (1980)の「対人スキル」はClayton & Birren (1980)の「感情的内容」(平和的、優しいなど)と共通していると考えられる。これまで英知の優れた洞察力、判断力、助言できる能力という面を強調してきたが、この「感情的内容」は、英知または賢者に対して、人格の面でも「優れている」ことが期待されている現れではないかと思われる。「平和的、穏やか、優しい、共感的、他者を認める・受け入れる」という「寛容さ」とでもような側面があることが示唆される。英知、賢人には優れた判断力、優れた知性と同時に人格を兼ね備えていることが期待されている。

最後に、Holliday & Chandler (1986)の「社会的慎ましき」は他の研究ではみられない側面であり、彼らも英知の構成要素としてあまり重要視していない。しかし、これは東洋的な美德のひとつであり、東洋における英知の暗黙的理論を明らかにしていく上で、鍵概念になる可能性があるのではないかと思われる。

III. 英知の明示的理論研究

最近の英知に関する実証的心理学的研究は、行動としてあらわれる英知をどのように測定するか、という研究に向かっている(Staudinger & Baltes, 1994)。それまでの英知の暗黙的理論を明らかにするという研究から、英知を操作的に定義し(明示的理論(Sternberg, 1985a; 1985b)をたてる)、更に英知または英知に関連した知識や行動、人格を実証的に研究し、理論の有効性と妥当性を検討する方向へと向かいはじめている。この流れは主に3つに大別できる; まず第1に英知の人格特性に焦点をあて、英知を評価、測定しようとする流れ(Erikson,

Erikson, & Kivick, 1986; Loevinger, 1976; Orwoll, 1988; Ryff, 1982; Walaskay, Whitbourne, & Nehrke, 1983-84など)、2つめは伝統的なPiagetの考えの発展形として英知を評価、測定しようとする流れ(Arlin, 1990; Kitchener & Brenner, 1990; Kramer, 1990; Labouvie-Vief, 1990, Pascual-Leone, 1990など)、そして最後に認知機能の生涯発達研究の流れから、困難な人生問題に対す問題解決行動として英知を評価、測定しようとする流れ(Baltes, Smith, & Staudinger, 1992)である。それぞれの英知研究において英知がどのように定義され、実証的研究がなされているかを概観する。

A. Eriksonianの人格研究

第1の流れは、主にEriksonの人格発達理論の妥当性や有効性を検証しようとする研究の流れである。人格理論では、一般に、英知は人格発達の最終段階もしくは発展段階において獲得されるものとして概念化されている(例えばErikson (1968), Kohlberg (1973a, 1973b)など)。この点で英知は「最善の成熟」(Staudinger & Baltes, 1994)といえる。

Erikson (1968, 1982)は自身の人格発達に関する心理社会的漸成発達モデルにおいて、最終段階における対立命題及び最後の危機のテーマとして、「統合対絶望」を挙げている。それは人生の最期(それがいつ、どのようにやってくるか分からないが)に示されているので、統合よりも絶望という失調要素のほうがまず頭に入ってくるが、しかし統合は、この最期の対立命題から熟して生まれると仮定する人間的強さが要請するものと同じもの、つまり英知という要素を必要とする、とEriksonは考えている。Erikson (1982)は英知を「死そのものに向き合う中で、生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」と述べている。これは「心と体の統合が崩壊に脅かされながら何らかの秩序と意味を維持する過程」であり、成全性(integrality)、つまりものごと全体を一つにまとめおく傾向ということもできる。最後の段階で絶望と統合との葛藤の中から英知を得ていくためには、一方でそれまでの人生課題について肯定的に達成していること、また、社会環境との間に促進的で良好な状況があることが望まれている。また、英知は個人的な関心を超越し、自らの有限性に熟知し、善なるもの、普遍的なものへの関心が高まるなど、成熟したアイデンティティを必要とする。Eriksonはまた、このような統合性、成全性を維持するとき、つまり英知を備えようとするとき、哲学的なもの(知恵を愛するもの)がそれを支える役割をすることがあることも指摘している。

Ryff & Heincke (1983) や Walaskay, Whitbourne & Nehrke (1983-84) はエリクソンの理論をもとにした自我統合を測定するための尺度を作成している。Orwoll (1988) は自我統合尺度を用いて、Erikson の理論の妥当性の検証を行い、英知を備わっていると推薦された人々はエリクソンの自我統合を測定する尺度得点が高かったこと、また対照群と比較して、世界情勢や人類愛について高い関心を向けていたことを報告している。Loebinger & Wessler (1978) は SCT による自我発達を測定する尺度を開発しているが、それを用いて自我統合と CPI (California Psychological Inventory) のコンピテンスとの間に関連性があること (Helson & Wink, 1987)、また自我統合と NEO-PI (NEO-Personality Inventory) の開放性に関連性があること (McCrae & Costa, 1980) などが報告されている。

一方、発達の視点による検討も行われている。Erikson, Erikson, Kivnick (1986) は老年期において8つの心理社会的発達課題がどのような方法で再統合されているのかを、80歳以上の高齢者を対象とした面接記録をもとにまとめている。また実証的にエリクソンの英知の発達を検証する試みも行われている。Ryff & Heicke (1983) は青年群、中年群、老年群を対象にエリクソンの統合感について検討したところ、老年群は他の年齢群よりも高い統合感を感じているという結果を得ている。また、Witbourne, Zuschlag, Elliot, Waterman (1992) は、青年と中年を対象とした縦断研究を行い、年齢が上がるにつれて統合感が上昇すると報告している。しかし、同時に、この研究では統合感のレベルが時代の流れの中で低下しているという傾向があることも認められた。これについて Witbourne らは、80年代の特徴ともなっている、西洋社会の個人主義や物質主義が影響しているのではないかと考察している。

B. Piagetian の認知発達モデル

明示的理論の研究における、もうひとつの流れは Piaget の理論を発展させた中で行われている。Kitchener (Kitchener & King, 1981 ; Kitchener, 1983 ; Kitchener & Brenner, 1990) は成人の認知発達に関するモデルである内省的判断モデル (Reflective Judgment model) を提案している。このモデルは英知そのものの発達モデルではなく、あくまで認知形態とそれにかかわる判断方法に関する発達モデルである。しかし、Kitchener がモデルの最終段階に位置づけている内省的判断力 (reflective judgement) は、これまでの英知の暗黙的理論研究やその他の英知に関する研究 (例えば Dixon &

Baltes, 1986 ; Kekes, 1983) において指摘されていた英知の諸側面と密接な関係があると考えられ、Kitchener (Kitchener & Brenner, 1990) 自身もその点を認めている。第1に全ての成人が直面しなければならない不可避的かつ困難な問題があることを認識していること (Dixon & Baltes (1986), Kekes (1983) と関連)、第2に深くかつ幅広い理解力によって得られた知識を総合的に把握すること (Clayton & Birren (1980), Dixon & Baltes (1986), Holliday & Chandler (1986) と関連)、第3に知識は不確実なものであるということ、および真実はいかなる時代においても完全に知られることはないのだということを知っていること (Clayton & Birren (1980), Dixon & Baltes (1986), Holliday & Chandler (1986) と関連)、そして第4に人生の不確実性に直面したときに、良識的かつ実行可能な判断をしようとする意志と、それができる格別な能力があること (Dixon & Baltes, 1986 と関連) を内省的判断力として仮定している点である。更にこれらは後述する Baltes の仮定する英知の機能的側面 (Baltes & Smith, 1990) とほぼ一致している。

このように Kitchener のモデルは英知の認知的な側面に焦点をあてたものである。更に Kitchener は認知発達のレベルを測定するために the Reflective Judgment Interview という測定尺度を開発している点など、実証的な研究をする上で成果を挙げている。

Arlin (1990) も Kitchener & Brenner (1990) と同様に、思考の発達段階モデルを提案しているが、Kitchener が最終段階として内省的判断力を仮定しているのに対して、Arlin は最終段階として問題発見能力 (problem finding) を仮定している。Arlin は英知と問題発見は同一のものではないが多くの共通要素があることを指摘し、英知を思考の発達過程の最終段階に位置づけている。一方 Pascual-Leone (1990) も英知を弁証法的な世界観の獲得との関連から、やはり発達過程の中に位置づけている。

Kramer (1990) は Orwoll & Perlmutter (1990) と同様に、感情と認知の統合を英知の中心的なものとして捉えている。すなわち Kramer は認知面での発達 (相対論的かつ弁証法的思考ができるようになること) と感情面での発達 (自我の発達、意識と無意識の統合、感情の調整が可能となること) という相互の発達の統合したところに英知を位置づけている。そして、英知には人生の問題を解決し、他者にアドバイスを与え、社会的な制度をマネジメントし、こころの内面を内省するという4つの機能があり、英知とは最終的には成人期に人々が遭遇する人生の様々な問題や葛藤を解決することができる能

力であると仮定している。そして、このような能力がうまく機能するには、英知と関連する少なくとも5つのプロセスが介在していると考えている。すなわち (1)個性 (個人差) を認識する, (2)文脈を考慮する, (3)効果的に相互作用できる能力を発揮する, (4)変化や成長を理解する, (5)感情と認知へ関心をむける, ことである。

以上のように、認知発達モデルでは、英知又は英知と関連のある能力を発達の最後の段階に位置づけている。又、英知の諸機能として経験にもとづいた深い知識、文脈の理解、個人差の認識、不確実性の認識とそれに対する適確な判断などが考えられている。

C. 問題解決行動としての英知研究

Piaget の発達モデルをもとに思考、認知の発達を考えた研究の1つの成果は、英知の認知的側面についてより精緻に検討し、英知又は英知と関連する能力に対して定義をしているところにある。しかし、実証的研究を行うための具体的な方法については今のところ必ずしも開発・整備されてはいない。

それに対し、Baltes は知能、熟達化、及び生涯発達の視点から英知を定義し、実証的な研究方法を開発 (Staudinger, Smith, & Baltes, 1994) している。

Baltes (Baltes, 1987 ; Baltes, Dittmann-Kohli, & Dixon, 1984) は知能の生涯発達に関する理論的枠組みとして知能の二重過程モデルを提唱している。Baltes は知能を情報過程の基本的なメカニクスの部分 (流動性知能とほぼ対応する) と、プラグマティクスの部分 (結晶性知能とほぼ対応する) に分け、前者の知能のハードウェア的な部分は加齢とともに失われるが、後者の知識の応用などを含む知能のソフトウェア的な部分は人生の後半においても発展する可能性があると考えている。そして英知は知能のプラグマティクスの部分と関連があり、それが成人期において発達した形の1つが英知となるのではないかと仮定している。

Baltes は当初、英知とは「生活における困難かつ不確実な問題に対する良い判断とアドバイス」(Baltes, Dittmann-Kohli, & Dixon, 1984 ; Baltes, 1987 ; Smith, Dixon, & Baltes, 1989) と定義していた。その後、英知とは「基礎的生活の実践に関する領域 (人生計画, 人生回顧, 人生マネジメント) における熟達した知識体系」(Baltes & Smith, 1990, Smith & Baltes, 1990) であるとし、英知の全体的な評価基準 (あるいは機能的結果) として「人間発達やライフイベントに対して優れた洞察をし、困難な問題についての的確な判断、助言、コメントをする」ことができることであるとした。更に、英知を

評価するために英知と関連のある5つの側面を設定している。その側面とは重要かつ複雑な人生の問題に対して (1)豊富な知識があること, (2)多様な手段や方法を知っていること, また, (3)様々な文脈から問題を理解し解釈していること, (4)価値や優先性についての差異についての知識があること, (5)人生の不確実性や相対的な不確定性の知識があることである。

Baltes の英知に関する操作的定義は知能をはじめとする認知機能の加齢研究、熟達化の研究および生涯発達のメタモデルを基礎としているが (Baltes, Smith & Staudinger, 1992 ; Smith & Baltes, 1990), 英知を「洞察, 判断, 助言する能力」とする点は、暗黙的理論研究において英知の主要な側面として指摘されていたものと共通している。また、英知を評価するための5つの側面の内容は、Kitchener, Kramer, Arlin がそれぞれに英知の機能的側面として仮定している内容をほぼ含む内容になっている。

ところで、Baltes は英知が発揮されやすい場面として人生計画と人生回顧の場面を設定している。そしてこの場面における人生問題を被検者に提示し、問題に対する解決法を声にだして回答してもらうという方法をとっている。検査者は回答を記録し、そのプロトコルをもとに、上述した5つの側面からそれぞれ7件法で評定がなされる。このような評定方法を用いる場合、評定者間の信頼性が高いことが望まれるが、Baltes は評定を行う前に評定マニュアルをもとにトレーニングを実施し、評定を行っており、2名の評定者の間で、.70~.82の一致率 (Smith & Baltes, 1990 ; Staudinger, 1989) が得られている。

Staudinger (1989) は人生回顧課題を用いて、英知の年齢差を検討し、英知の操作的定義の中の不確実性の知識において年齢差が認められ、若い年齢群よりも老年群の方がより人生の不確実性を理解していたという結果を得ている。しかし、Smith & Baltes (1990) の人生計画課題を用いた英知の年齢差の検討では、年齢差は認められず、英知は単に加齢とともに発展するのではなく、むしろ個別的で特有な人生経験が反映していることが示唆された。その後、人生経験 (職業経験) 及び加齢と英知との関係 (Staudinger, Smith, & Baltes, 1992 ; Smith, Staudinger, & Baltes, 1994), Baltes らの英知の操作的定義の妥当性の検討 (Baltes, Staudinger, Maercker, Smith, 1995), またどのような相互作用状況が英知と関連した行動を促すか (Staudinger & Baltes, 1996) についての検討が行なわれている。

IV. まとめ

英知とは何か？ —という疑問からはじまった心理学的英知研究を、暗黙的理論研究および、明示的理論研究の双方から概観してきた。

まず、英知の暗黙的理論研究より、英知は「洞察力、判断力、アドバイス」すること、及び「年齢を重ね、経験豊かであり、人生の問題を大きな文脈の中で把握することができる」ことであることが明らかになった。また、英知を身につけた人には人格的にも優れていることが期待されており、賢人は優れた知性と人格を兼ね備えていることが示唆された。ところで、Clayton & Birren (1980) によると、心理学以前の哲学や宗教では、洋と東西を問わず、英知とは人生の意味、事象の本質などに関する特別な知識体系であると考えられている。また、英知という言葉は成熟した人の中にある肯定的な特質を指すものとして使用され、英知を身につけた人には、人格的にも道徳的にも優れていることが求められていたという。これは、まさに人々が英知にもっている暗黙的理論と同一のものであり、現代においてもなお、人々の英知に対する暗黙的理論は、哲学、宗教の影響を強く受けていることが示唆される。

その後の英知の実証的研究では、英知の人格的側面と認知的側面の統合よりはむしろ、英知の人格的側面、または認知的側面のどちらかに焦点をあてて行われるものが主流となっている。その中で、特に認知的側面に焦点をあてた研究では、英知の機能について精緻なモデル化が行なわれ、経験にもとづいた広くて深い知識、文脈の理解、不確実性の認識とそれに対する適確な判断、個人差の認識など英知の様々な機能が整理されている。

一方、Baltes の英知に関するモデルは、もともとは知能を中心とする認知機能の研究から発展したものであるが、英知の暗黙的理論における英知の主要な機能や、認知発達モデルにおける英知の機能をよく反映させたものとなっている。また研究方法も開発されており、英知の認知的領域に関して実証的研究をおこなっていく上では、現在、最も有効なモデルの一つであると思われる。

ところで、心理学では、英知は成年期以降の発達をあらわす可能性をひめた特性として注目されてきたのであるから、心理学的英知研究において、英知は年齢とともに発達するものなのか、という疑問に答えることは、英知のプロトタイプを規定するのと同様に重要な問題である。現在、認知発達のモデルでは、成人の認知構造は発達をつづけ、青年期までと構造的に異なることが仮定されている。英知も認知発達の最終段階のものと密接に

関連していることから、英知は年齢とともに発達するののかという問題に対して、英知は年齢とともに発達していくことが想定されている。また、人格理論においても英知は発達の最終段階に位置づけられている。

しかし、暗黙的理論研究や Baltes の実証的研究からは、英知を身につけるには時間は必要であるが、必ずしも歳をとることは必要とはされていないことが示唆されている。更に、Meacham (1990) は英知は加齢とともに上昇するよりはむしろ下降する可能性の方が高いことを示唆している。単に歳を重ねるだけではなく、そこにはさまざまな状況での経験や、個人の資質、人格、動機、生理的機能、など様々な要因が英知の形成には関係していくと思われる。今後、心理学的英知研究では、英知の加齢変化の検討ばかりでなく、英知の形成に影響を与える要因について解明していくことも必要となってくるであろう。

(指導教官 下仲順子客員教授)

引用文献

- Arlin, P K 1990 *Wisdom, the art of problem finding* In R J Sternberg (Ed.), *Wisdom-Its nature, origins, and development* New York · Cambridge University Press pp.230-243.
- Baltes, P B 1987 Theoretical propositions of life-span developmental psychology · On the dynamics between growth and decline *Developmental Psychology*, 23, 611-626.
- Baltes, P B., Dittmann-Kohli, F, & Dixon, R A. 1984 New perspectives on the development of intelligence in adulthood : Toward a dual-process conception and a model of selective optimization with compensation. In P.B Baltes, & O G Brim, Jr. (Eds.), *Life-span development and behavior*, Vol 6 New York . Academic Press pp.33-76.
- Baltes, P B. & Smith, J 1990 Toward a psychology of wisdom and its ontogenesis. In R J. Sternberg (Ed), *Wisdom-Its nature, origins, and development* New York Cambridge University Press pp.87-120
- Baltes, P.B, Smith, J. & Staudinger, U M 1992 Wisdom and successful aging. In T B Sonderegger (Ed.), *Nebraska symposium on motivation*, Vol 39, Lincoln University of Nebraska Press pp 123-167
- Baltes, P B, Staudinger, U M, Maercker, A, & Smith, J 1995 People nominated as wise A Comparative study of wisdom-related knowledge *Psychology and Aging*, 10, 155-166
- Baltes, P B., Reese, H W and Lipsitt, C P. 1980 Life-span developmental psychology *Annual Review of Psychology*, 31, 65-110
- Cattell, R B 1971 *Abilities : their structure, growth, and action*. Boston : Houghtson Mifflin.
- Clayton, V 1975 Erikson's theory of human development as it applies to the aged wisdom as contradictory cognition *Human Development*, 18, 119-128.
- Clayton, V & Birren, J E 1980 The development of wisdom across the life-span : a reexamination of an ancient topic. In

- P.B. Baltes & O.G. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior* Vol.3. New York : Academic Press. pp.103-135.
- Chandler & Holliday 1990 Wisdom in a postapocalyptic age. In R.J. Sternberg (Ed.), *Wisdom-Its nature, origins, and development* New York : Cambridge University Press. pp.121-141.
- Dixon, R.A., & Baltes, P.B. 1986 Toward life span research on the functions and pragmatics of intelligence. In R.J. Sternberg & R.K. Wagner (Eds.), *Practical intelligence*. New York : Cambridge University Press. pp.203-235.
- Erikson, E.H. 1968 *Identity : Youth and Crisis*. York : W.W. Norton (岩瀬庸理 (訳) アイデンティティ—青年と危機 金沢文庫)
- Erikson, E.H. 1982 *The Life Cycle completed*. New York : W.W. Norton. (村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) ライフサイクル—その完結 みすず書房)
- Erikson, E.H., Erikson, J.M. & Kivnick, H.Q. 1986 *Vital Involvement in Old Age*. New York : W.W. Norton. (朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) 老年期—生き生きしたかかわりあい みすず書房)
- Hall, G.S. 1922 *Senescence : The Hafe of life*. New York : Appleton
- Heckhausen, J., Dixon, R.A., & Baltes, P.B. 1989 Gains and losses in development throughout adulthood as perceived by different adult age groups. *Developmental Psychology*, 25, 109-121.
- Holliday, S.G. & Chandler, M.J. 1986 *Wisdom : explorations in adult competence*. Basel, Switzerland : Karger.
- Jung, C.G. 1933 The stage of life. In J. Campbell (Ed.), *The portable Jung*. New York : Viking.
- Kekes, J. 1983 Wisdom. *American Philosophical Quarterly*, 20, 277-286.
- Kitchener, K.S. 1983 Cognition, metacognition and epistemic cognition : a three-level model of cognitive processing. *Human development*, 4, 222-232.
- Kitchener, K.S. & King, P.M. 1981 Reflective Judgment : concepts of justification and their relationship to age and education. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 2, 89-116.
- Kitchener, K.S. & Brenner, H.G. 1990 Wisdom and Reflective Judgment : Knowing in the face of uncertainty. In R.J. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity : contemporary psychological perspectives*. New York : Cambridge University Press. pp.212-229.
- Kohlberg, L. 1973a Continutites in childhood and adult moral development revisited. In P.B. Baltes & K.W. Shaie (Eds.), *Life-span development : personality and socialization*. New York : Academic Press.
- Kohlberg, L. 1973b Stages and aging in moral development : Some speculations. *Gerontologist*, 13, 497-502.
- Kramer, D.A. 1990 Conceptualizing wisdom : the primacy of affect-cognition relations. In R.J. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity : contemporary psychological perspectives*. New York : Cambridge University Press. pp.279-316.
- Labouvie-Vief, G. 1990 Wisdom as integrated thought : historical and developmental perspectives. In R.J. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity : contemporary psychological perspectives*. New York : Cambridge University Press. pp.52-86.
- Loevinger, J. 1976 *Ego development. Conceptions and theories*. San Francisco : Jossey-Bass.
- Loevinger, J., & Wessler, R. 1978 *Measuring ego development I : Construction and use of a sentence completion test*. San Francisco : Jossey-Bass.
- McCrae, R.R., & Costa, P.T. 1980 Openness to experience and ego level in Loevinger's sentence completion test : Dispositional contributions to developmental models of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 1179-1190.
- 中西信男 1995 英智の心理 ナカニシヤ出版
- Helson, R., & Wink, P. 1987 Two conceptions of maturity examined in the findings of a longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 531-541.
- Orwoll, L. 1988 Wisdom in late adulthood : Perosnality and life history correlates 未発表 Staudinger & Baltes (1994) より引用
- Orwoll, L. & Perlmutter, M. 1990 The study of wise persons : integrating a personality perspective. In R.J. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity : contemporary psychological perspectives*. New York : Cambridge University Press pp. 160-180.
- Pascual-Leone, J. 1990 An essay on wisdom : toward organismic processes that make it possible. In R.J. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity : contemporary psychological perspectives* New York : Cambridge University Press. pp 244-278.
- Perlmutter, M., Adams, C., Nyquist, L., & Kaplan, C. 1988 Beliefs about wisdom. 未発表 Oewoll & Perlmutter (1990) より引用
- Ryff, C. 1982 Self-perceived personality change in adulthood and aging. *Journal of Perosnality and Social Psychology*, 42, 108-115.
- Ryff, C.D., & Heincke, S.G. 1983 The subjective organization of personality in adulthood and aging. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 807-816.
- Smith, J., Dixon, R.A., & Baltes, P.B. (1989). Expertise in life planning : a new research approach to investigating aspects of wisdom. In M.L. Commons, J.D. Sinnott, F.A. Richards, & C. Armon (Eds.), *Adult development : comparisons and applications of adolescent and adult developmental models* Vol.1, New York : Praeger. pp 307-331.
- Smith, J., & Baltes, P.B. 1990 Wisdom-related knowledge : Age / cohort differences in responses to life planning problems. *Developmental Psychology*, 26, 494-505
- Smith, J., Staudinger, M., & Baltes, P.B. 1994 Occupational Settings Facilitating Wisdom-Related Knowledge : The sample Case of Clinical Psychologists. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62, 989-999.
- Staudinger, U.M. 1989 The study of life review : An approach to the investigation of intellectual development across the life span. Berlin : Sigma.
- Staudinger, U.M., & Baltes, P.B. 1994 The psychology of wisdom. In R.J. Sternberg (Ed.) *Encyclopedia of intelligence*. New York : Macmillan. pp.1143-1152.
- Staudinger, U.M., & Baltes, P.B. 1996 Interactive Minds : A Facilitative Setting for Wisdom-Related Performance ? *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 746-762.
- Staudinger, U.M., Smith, J., & Baltes, P.B. 1992 Wisdom -Related knowledge in a Life Review Task . Age Differences and the Role of Professional Specialization. *Psychology and Aging*, 7, 271-281.
- Staudinger, U.M., Smith, J., & Baltes, P.B. 1994 *Manual for the assessment of Wisdom-Related Knowledge*. Berlin : Max Planck Institute for Human Development and Education.
- Sternberg, R.J. 1985a *Beyond IQ : a triarchic theory of human intelligence*. New York : Springer-Verlag.
- Sternberg, R.J. 1985b Implicit theories of intelligence, creativity,

- wisdom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 607-627
- Sternberg, R.J. 1988a Mental self-government . a theory of intellectual styles and their development. *Human Development*, 31, 195-224
- Sternberg, R J 1988b A three-facet model of creativity. In R J Sternberg (Ed.), *The nature of creativity · contemporary psychological perspectives* New York : Cambridge University Press pp 125-147
- Sternberg, R J. 1990a Understanding wisdom In R J Sternberg (Ed.), *Wisdom-Its nature, origins, and development*. New York : Cambridge University Press pp.3-12.
- Sternberg, R.J 1990b Wisdom and its relations to intelligence and creativity. In R.J. Sternberg (Ed.), *Wisdom-Its nature, origins, and development* New York : Cambridge University Press. pp 142-159
- Walaskay, M., Whitbourne, S.K., & Nehrke, M F. 1983-84 Construction and validation of an ego-integrity status interview. *International Journal of Aging and Human Development*, 18, 61-72
- Witnourne, S K., Zuschlag, M.K., Elliot, L.B , & Waterman, A.S 1992 Psychological development in adulthood. A 22-year sequential study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 260-271.